第３学年　国語科　学習指導案

１　単元名　　「評価する力」をつけよう　～本歌取りを題材として～

２　単元の目標

三つの短歌に描かれている作品世界のイメージを広げる活動を通して，作品のよさや作者の個性について記述することができる。

３　単元を学ぶ意義

生徒はこれまで国語の時間に，「短歌の世界」（２年）という単元や「和歌の世界」（３年）という単元で，短歌について学習してきている。その学習を通して生徒は，短い言葉の中に込められた作者の思いを想像することの楽しさや短歌という表現方法のよさを感じ取ってきている。また，万葉集，古今和歌集，新古今和歌集と時代が進むにしたがって表現技法が洗練され，より技巧的になっていくことも知識として得てきている。

これは，国語科学習指導要領「３　指導計画の作成と内容の取扱い」１（４）イ「古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに，我が国の伝統や文化について関心を深めるようにすること」を受けて，同書「内容　読むこと」の「ウ　表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」をねらったものである。学習指導要領の意図することは「表現そのものの美しさ，豊かさ，楽しさに生徒の目を開くこと＊[1]」であり，生徒は短歌それぞれを名歌として肯定的に理解し，味わってきたのである。

この学習をふまえて，この授業では，短歌に対する見方や考え方を広げ，「評価する力」を高めていく。

「評価する力」とは，「これまで持っている情報や他のテキストにあるような情報に基づき，自分の知識や信念に照らして，知的な表現＊[2]」をする力であり，自分の判断が求められるという点で「批判的な読み」(Critical Reading) とも関連している。

「批判的な読み」とは「文章を最初から正しい絶対的なものとして受容しないで，その表現や論理，認識のありようを問い，検討しながら読むことである」と寺井（2000）＊[3]は定義付けている。批判的という言葉は否定的な意味で受け取られることが多いが，批判的な読みとは，「ここはよく分かるなあ」「これは本当にそうかなあ？」などと納得を求めながら，書き手の意図を吟味し，評価していくことなのである。

以上のことは，国語科学習指導要領「２ 内容　Ｃ 読むこと」の「エ 文章を読んで人間，社会，自然などについて考え，自分の意見をもつこと」に関連しているものの，学習指導要領では批判的に読むことまで明らかに求めてはいない。ゆえに，今回の授業は，国語科のねらいを越えて行うものであり，より鋭角的に「評価する力」の高まりを目指すものである。

ところで，本単元では，本歌取りという手法を用いた２首と，その本歌１首を比較するという活動を組織する。

＊１　河野庸介・金子守 編著 １９９９ 『改訂中学校学習指導要領の展開 国語科編』 明治図書 p.93
＊２　国立教育政策研究所 監訳 ２００４ 『ＰＩＳＡ２００３年調査評価の枠組み』 ぎょうせい p.99
＊３　寺井正憲 ２０００ 「論理的思考力に資する『読むこと』の学習指導」（東京法令出版『月刊国語教育』第２３６号）p.22

わが袖は水の下なる石なれや人に知られでかわく間もなし	和泉　式部
わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間ぞなき	二条院讃岐
わが袖はほのかに人を水茎（みづくき）の岡の木の葉のかわく間ぞなき	藤原　家隆

これら三つの短歌は，上から，平安時代中期の女流歌人である和泉式部（いずみしきぶ），平安時代末期の女流歌人である二条院讃岐（にじょういんのさぬき），鎌倉時代初期の歌人で，『新古今和歌集』選者の一人である藤原家隆（ふじわらのいえたか）によって詠まれたものである。いわゆる短歌の名手として名高い３人が，時代を越えて改作していったもので，それぞれの微妙な感性の違いが表れている。

本歌取りとは，有名な古歌の表現を引用して，その世界との重層化をはかる技法である。鎌倉時代に，本歌取りを修辞法として大成させた藤原定家は，その真髄を「詞は古きを慕ひ，心は新しきを求め，及ばぬ高き姿をねがひて」と，『毎月抄』の中で述べている。

換言すれば，本歌取りとは本歌のよさを認めつつ，よりよい短歌を創出しようとする営みであり，後代の人間が，過去の人間の感性を「評価」したものとも言える。およそ，後代に詠まれた短歌の方が本歌を越えるものと評価されてはいるが，「すべてがそうではない」との見方や，本歌取りという表現技法自体を否定する考え方もある。

今回，教材として選んだ３首には，共通して「わが袖は～かわく間もなし（間ぞなき）」という言葉が使われている。これらの言葉は，とめどなく流れ落ちる涙を袖で拭うことから，切ない恋心を暗喩的に表現したものである。そのような基本的構造は変わらないのであるが，胸に秘めた恋心を，式部（本歌）は「水の下なる石」に，讃岐は「沖の石」に，家隆は「水茎（みづくき）の岡の木の葉」に，それぞれたとえている。

式部の短歌から讃岐の短歌への変化は，同じ「石」をモチーフにしていることから，創作の連続性を読み取ることができる。さらに「水の下なる石」を，決して見ることができない「沖の石」に変えたところに，讃岐の短歌の優位性を感じ取ることができる。

讃岐の短歌と家隆の短歌には，「かわく間ぞなき」という係り結びを使った第５句に，共通性が見られる。また，家隆の短歌には「水茎（みづくき）の岡の木の葉」（歌枕，枕詞，掛詞が使用された言葉）が見られることから，他の短歌と比べてより技巧的であり，ゆえに創作された年代がより新しいことが推察されるのである。

生徒は，これら三つの短歌の意味を辞書的に調べ，情報を肯定的に取り出す「理解」の段階，三つの短歌を時代順に並べかえる「解釈」の段階，そして，三つの短歌の中から最も優れているものを選ぶ「評価」の段階を経ていく。

そうすることで，次の二つのことを実感するようになるだろう。

○　短歌は固定されたよさがあるわけではなく，時代や鑑賞者によってさまざまな評価が下されていくということ。

○　名歌と呼ばれるものに対しても，自分の感性に基づいて評価しても構わないということ。

以上のような見方・考え方を得た生徒には，最終的にそれぞれの作品のよさや作者の個性に気付き，それを的確に記述できるようになってほしい。そのような姿は，「評価する力」が高まった姿だと言えるのである。

４　指導の構想

まず，三つの短歌を不連続に提示し，「三つの短歌の違いは何ですか」と問う。そうすることで，それぞれの言葉の意味を辞書を使って正確に捉えるように促す。

次に，三つの短歌が時代を越えて改作されていったことや，このような技法を「本歌取り」という

ことを伝え，「これらの短歌は詠まれた時代がそれぞれ違います。どのような情報があれば，古い順に並べられますか」と発問する。こうすることで生徒は，短歌に使われている言葉により注目し，成立年代の違いを見極めるために必要な情報とは何かを考え，必要な情報を収集する。そして，収集された情報と，それに基づく意見を交流する場を設定することで，生徒は情報の得方や，活用の仕方を学び，さまざまな解釈の違いに気付く。意見交流後，授業者が正しい順序，そうなる理由（内容の連続性と技巧的な変化），短歌についての詳しい情報を１枚のシートにまとめて伝える。

最後に，「あなたが和歌集の撰者で，一首選ぶとしたら，どの短歌をどんな理由から選び出しますか」と問う。こうすることで，生徒に，シートから必要な情報を選び出し，それらを基に理由付けを行い，自分なりに短歌を評価していくように促すのである。そして，互いの考えを意見交換する場を設けることで，生徒は三つの短歌それぞれのよさと，作者の個性に気付いていく。

これら一連の活動を通して，生徒に「評価する力」を身に付けさせていく。

５　指導と評価の計画（本時３／３時間目）

学習内容・学習活動	予想される生徒の反応・教師の支援	評価・留意点
①　短歌３首の意味をとらえる。 【２，３年読むことア】	説明：「本歌取り」とは有名な古歌の表現を利用して，よりよい短歌を創出しようとする営みです。 指示：「わが袖は水の下なる石なれや人に知られでかわく間もなし」「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間ぞなき」「わが袖はほのかに人を水茎（みづくき）の岡の木の葉のかわく間ぞなき」一つ一つの短歌の意味をまとめなさい。	・辞書等を事前に準備させる。 ・違う箇所に線を引かせてから調べるように促す。 ・表現技法「係り結びの法則」「枕詞」「掛詞」を想起させる。 ・語釈のヒントとなる資料を準備する。 三つの短歌の意味を正しく解釈している。
②　各短歌を成立年代順に並べ換えるために必要な情報を考え，収集し，成立順序を明らかにする。 【２，３年読むことウ】	発問：これらの短歌は詠まれた時代がそれぞれ違います。どのような情報があれば，古い順に並べられますか。 発問：それぞれの短歌を，理由をつけて古い順に並べなさい。 指示：順序を付けた理由について意見を述べなさい。	・情報の得方や方法を個別指導し，情報収集するように促す。 ・どの順番になるのか，自分と同じ意見にネームプレートを貼るように促す。 ・教師は論点を絞りながら討論をコーディネートする。 ・最後に正しい順番を教えて，詳しい

		情報を１枚のシートで提供する。 三つの短歌の成立順を理由付けて述べている。
③　自分なりに作品のよさや作者の個性について述べることができる。（本時） 【２，３年読むことエ】	発問：あなたが和歌集の撰者で，一首選ぶとしたら，どの短歌をどんな理由から選び出しますか。 ＜期待する意見＞ 私は「沖の石」の歌を選びます。なぜなら，資料に「恋心を見えない遙かな沖の石にした発想が斬新」とあり，その意見に賛同するからです。	・三つの短歌を比較する中で，それぞれの短歌のよさや作者の個性に言葉が及ぶようにコーディネイトする。 ・最後に学んだことを確認する。 好きな短歌を一首選びその理由を述べている。

６　本時

(1) ねらい

三つの短歌から好きな一首を評価，選択する活動を通して，それぞれの作品のよさや作者の個性について記述することができる。

(2) 展開

学習内容・学習活動	予想される生徒の反応・教師の支援	評価・留意点
①　詳しい情報が書かれた資料や自分の価値観を基に，理由を明確にして短歌を一首選び，発表する。 【２，３年読むことエ】	発問：あなたが和歌集の撰者で一首選ぶとしたら，どの短歌をどんな理由から選び出しますか。 ・詳しい情報が書かれた資料を基に，それぞれの作品を評価しながら読む能力を発揮できるようにするために，上記の発問をする。 ・短歌３首いずれかの立場に立ち，理由を書いた人から黒板上にネームプレートを貼るように促す。意見が変わったら，ネームプレートを貼り替えることを推奨する。 ＜期待する意見＞ **「水の下なる石」を選んだ人の意見** ・私は「水の下なる石」の短歌を選びます。この短歌は，資料によれば，そもそも他の２首の本歌と	自分のシートに，意見と理由付けを記述するように促す。 授業者は，三つの短歌を比較する中で，それぞれの短歌のよさや作者の個性に言葉が及ぶように授業をコーディネイトする。

	なったものです。秘めた恋心を水中の石にたとえている着想こそが優れていると私は判断します。 **「沖の石」を選んだ人の意見** ・私は「沖の石」の短歌を選びます。なぜなら，資料に「恋心を見えない遙かな沖の石にした発想が斬新」とあり，その意見に賛同するからです。さらに，百人一首に採用されるほど評価されていることも理由の一つです。 **「岡の木の葉」を選んだ人の意見** ・私は「岡の木の葉」の短歌を選びます。この短歌は，資料にあるように，他の２首から影響を受けているばかりか，新古今和歌集の他の短歌からも影響を受けています。ゆえに，技巧に優れ，イメージを多重に取り込んでいるところがこの短歌の深さにつながっていると思います。	「本歌取り」は，本歌のよさを認めつつ，さらに優れた表現を模索したものである。しかしながら「時代が新しければよりよい短歌である」とは言い切れない。判断基準は個人の感性であることを，最後に説明する。
②　最終的な判断とそう判断した理由をワークシートに記述する。 【２，３年読むことエ】	指示：話合いを通して，最終的な判断とそう判断した理由をワークシートに書きなさい。 ・最後に学んだことを確認する。	好きな短歌を一首選びその理由を述べている。

(3) 評価

評価場面・方法	評　価　A	評　価　B
全体における発表場面 （観察およびワークシート記述により評価）	好きな短歌を一首選び，その理由を作品のよさや作者の個性にかかわって論理的に述べている。	好きな短歌を一首選び，その理由を自分の生活経験や価値観から述べている。

＜参考文献＞　三省堂　国語教育『ことばの学び』Vol.17 2008年10月　※筆者は同一
URL　http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/kokugo/magazines/lang-edu/pdf/017_pdf/017_011.pdf